

平成十八年度

四月四日

散歩道花の光に誘はれて

梅に酔ひ花に疲れてぐっすりと

ポストまで足取り軽く花の道

四月六日

新しき友を歓迎桜咲く

花見酒何でも言える友と酌む

四月七日

六十が八十の介護花見かな

花の昼乙女と憩うティータイム

四月十日

下駄箱に夢も入れたる新入生

春の午後のの字を書きし見合いかな

花冷えや決して冷えない句の心

四月十一日

図書館の前の公園燕来る

履歴書に学舎想ふ入社式

介護士と相々傘や花の雨

古傷のじわつと痛む菜種梅雨

春の風分けて鈴の音バスが行き

四月十四日

石鹼の香りも飛ばすしゃぼん玉

啄木の詩を想ふや山笑ふ

夕南風と愛に迎えし帰宅の子

四月十八日

百舌鳥鳴くや会話の絶へぬ少女かな

四月十九日

久に会ふ友もオムツや花は葉に

四月二十四日

こいのぼり泳ぎし頃や祖父の忌も

四月二十五日

白寿超へ長生き願ふ母の日に

好きですと思はぬ人に青嵐

白牡丹色に誘はれ古刹へと

嫌なこと落して滝は流れくる

平成を平安に戻す夏祭り

鳴かぬなら笑ってみせよホトトギス

四月二十六日

告白の結果どきどき汗の顔

腕白の心も撃ちし水鉄砲

衣更え脱げば乙女の白き腕

五月三日

生きていることを確かめ青き踏む

年金でプランに思案初夏の旅

高原は子どもの世界風薫る

三重県山の一旬応募

風薫るこの夢回る風車かな

青山は風車の里や風薫る

三重県山の一旬応募

新緑が目には焼きつきし友と旅

ウグイスがようこそここへと山に鳴く

心地よき青葉風うけ昼餉かな

いつの間に甥は酒豪に子どもの日

五月八日

杉の香が青葉風乗り我がほほへ

五月九日

卯の花や何故か童謡口ずさむ

焼き鮎の香りあふれる美杉村

ひげ面の友を思つや山しげる

五月十二日

髭剃りは男の介助端午の日

青葉風乗りて杉の香我が頬へ

五月十五日

松竹梅何故か杉なし酢ランク

ワイパーの点検忙し梅雨の午後

絵の具では描けない青さ五月晴れ

五月十六日

弁当に時季ときも食べたる豆の飯

五月十九日

米寿超え句心盛んバラ真っ赤

五月二十二日

五月晴れ木登りする子天までも

五月二十三日

昔の子五杯は軽く豆の飯

五月二十四日

五桂へ梅雨で流れしデートかな

五月二十六日

虹の橋青田の水面に入りけり

五月二十九日

五月闇我に光を君の笑み

梅雨さなかデートはここと映画館

旅プラン梅雨というもの入れにけり

六月七日

夏の蝶青田の中に忍び込む

六月十五日

万緑に吸いこまれていく電車かな

「交通総合文化展 06」応募

六月十九日

駅員もノーネクタイや街薄暑

「交通総合文化展 06」応募

死に顔は童のごとく五月闇

汗をして作句活動に見童かな

童心をすくいて金魚すくいかな

六月二十日

梅雨晴間童謡流れる交流会

香水で君だと分かる仲となる

蠅すらもよけない体五十過ぎ

隠し味共に教える梅漬女

六月二十一日

焼鮎の香りこぼれる小料理屋

六月二十二日

炎天下信号待ちの長きこと

梅雨空を乙女の愛で晴れとなる

梅雨最中ひいきのチームは絶不調

六月二十三日

遠方のサッカー熱き熱帯夜

初盆や遠きあの世とつながり

六月三十日

老鶯やきれいに老ひて生きつづけ

源平の光争ふ螢の夜

七月三日

籐椅子に父を偲びし座りけり

浴衣までペアルツクの二人かな

平家里源氏螢の偲びけり

七月七日

炎天下出てきた雲に礼を言ふ

七月十二日

戦事絶えぬ毎日敗戦日

海底の眠る戦友敗戦日

また一人遠退く句会梅雨寒し

雲の峰めがけてラジコンヘリコプター

海豚の芸みたくて友と志摩の旅

嫌なこと共に流して髪洗ふ

七月十三日

夏の海雄三の歌口ずさむ

祭り髪少女は乙女に変はりけり

七月十四日

一人身の首が回らぬ扇風機

散歩道一歩でやめる暑さかな

夕立や人生そんなにあまくない

七月十八日

海の風ゆれてすやすやハンモック

行きたくない行かねばならぬ友の盆

七月二十四日

長き梅雨またも壊れし旅プラン

七月二十五日

大昼寝夢の中だけお金持ち

白き雲花火で焦がし暗闇に

大海にしばし暑さを置きにけり

七月二十八日

便りなしことも便りや帰省の子

七月三十一日

句集でき心も晴れて梅雨明ける

帰省の子真黒な肌に安堵かな

八月一日

竹の道流れてそうめん口元へ

八月七日

波の華見たくて夏の志摩

良き景色涼を求めて夏の志摩

暑いですひと言ふえし九官鳥
蝉時雨人の気配に止みにけり
散歩道一步一步に汗光る

八月十一日

風鈴の音色に聞き惚れ交流会
車いすタイヤも痩せる夏の午後

八月二十三日

志摩の青横目に友と夏料理

新涼も待っている駅の待合室

秋暑し乙女の薄着気になりし

あればいい地球を仰ぐ秋扇

読売新聞投稿

読売新聞投稿
06年9月12日
佳作
掲載

敗戦日魚仲良く水族館

原爆日空は何かをたけんでる

我よりも太りしスイカ店先に

よく来たと父の声する墓洗ふ

ペンギンのよちよち歩き爽やかに

八月二十八日

星月夜水金地火木一つ消へ

解体の旧家に寂しく秋の風

鱚雲今夜のおかずにしたいほど

九月一日

秋風や閉店間近百貨店

読売新聞投稿

読売新聞投稿

九月六日

秋の蚊に生きる尊さ教へられ

命の俳句応募作品

恋こそは生きる源秋の夜

命の俳句応募作品

九月七日

親王を祝ふ夕餉の栗おこわ

山本海苔店俳句応募

栗食べて遠き中国ふと思ふ

山本海苔店俳句応募

君と食ぶマロンケーキのなほ甘き

入賞 ホームページに掲載

九月十四日

松茸の香りもサービス託老所

モーツァルト聞きつつ夜長ぐっすりと

代議士がこの時だけは赤い羽根

九月十五日

借りし物ようやく返す爽やかに

輝きし佳作の一行実りの秋

秋晴れの青をつかみしクレールン車

我が俳句置かれし古刹爽やかに

九月二十六日

敬老の日介護が趣味となりにけり

主婦の愛かぼちゃスープに溶け込みし

九月二十七日

運動会走り方まで似る親子

九月二十八日

やきいも屋声が少なくなる時代

山本海苔店俳句応募

十月四日

若者のロック響きし秋の空

未消化の本読み通す秋の夜

よき友と別れを惜しむ秋惜しむ

十月六日

秋風と電波が運ぶ友の声

十月十日

神の旅友も旅なり我は留守

弁当も我が家が一等運動会

母の里紅葉の色に包まれし

十月十六日

秋の夜君の膝にて耳そうじ

消え去りしバントの名人秋の風

十月十八日

句と食を満たす熟柿友くれし

秋の夜どっこい生きてる冥王星

十月十九日

神の旅承知の上で伊勢に行く

悪役がいて成り立つ劇藪柑子

十月二十三日

りんご食ぶ与謝野の初恋読みながら

十月二十七日

どんぐりや幼な心も拾いけり

十一月七日

秋惜しむ門前町をぶらり旅

紅葉の中にとけこむ電車かな

静けさや秋の声のみ外宮かな

出迎えの菊の香りと巫女の笑み

しばらくは旅の余韻の夜長かな

秋晴や帰ってこないブーメラン

十一月八日

感謝祭かぼちやの顔の友に似て

木枯しや貧乏暮し抜けきれず

人形も微笑むパレード秋祭り

十一月十日

彫刻のカラス羽ばたく秋の空

十一月十三日

母校へと近づく電車冬景色

紅葉の美を競ひたる絵画展

沿線のいちごハウスの香の届く

十一月二十日

和太鼓に能登を思うや文化祭

十一月二十二日

小春経て友は旅立つ異国へと

十二月四日

着ぶくれの人にふくらむ電車かな

夢求めくじ買ふ列や年の暮

留守番を楽しくこなしおでん食ぶ

十二月五日

聖菓切る二人の仲は永遠切れず

マジックで時を消し去る忘年会
地下街の上に落ち葉の舞い上がる

十二月十五日

甦る昭和の事や賀状書く
年賀状名前でわかる世代かな

十二月十八日

南極の氷も溶かす恋心
冬帝も投げ飛ばすなり格闘家
焼いもの湯気に誘はれ財布開く

十二月十九日

一人増え一人減りゆく納め句会

十二月二十五日

息白く食事介助の生徒かな

一月九日

年賀状友の笑顔の浮かびくる

玉砂利を踏む音かるやか初詣

年賀状思ひもよらぬ名のありて

餅ふわり句心ふわりふくらみて

冬の朝親子で貼り合うサロンパス

凧さえもあがらぬ空や今の時世

自慢げに二世の顔や年賀状

一月十一月

風花にときめく心まだ残り

予報とはうまく違って梅日和

一月十六日

絵画展ポスター微笑む春近し

登校生足もおどるや春来る

春といふ季節が君を輝かせ

一月二十三日

ワイパーの楽しく動く春の雨

一月二十七日

空港は乙女の宝庫春来る

船の窓しづき輝く春の海

一月二十九日

空港は小さい街や風光る

一月三十日

春の空突き破るごとくジェット飛ぶ

一月三十一日

思い出とハンカチ捨てる午祭

からくりの人形微笑む春の午後

二月五日

鬼の面やさしき君に似合わない

願ひ事絵馬に託して受験生

二月九日

我が俳句君の事多きバレンタイン

二月十四日

腰痛の母を守るや四温光

二月十六日

ひなまつりいつかは我も内裏の座

悩み事解消したる雪解かな

二月十九日

温暖化春の足音加速させ

待合はいつもの梅の傘の下

三月八日

和菓子屋の箱も中身も春の色

春の風乗せてオペラの軽やかに

若者のロツク流れる春の午後

三月九日

菜の花の香り包まれ登校子

三月十五日

散り初めし梅もまた良し散歩道

三月十六日

生活のリズムの変る四月かな

三月十九日

春風も後押ししてるバザーかな

葉っぱまで老舗の味や桜餅

三月二十日

花満開その真ん中に君と僕

毎日が海老やカニだと四月馬鹿

三月二十二日

花園でデートに来ている二羽の蝶